

子供の嫁方ににつきて

相模 通信員 平 岩 繁 治

私は子供の嫁方につきましたして少し感した事があ
りますから御話致しませう。

私の親戚に一人のわんぱく子供がありました、年はまだ六才二ヶ月許りであります、年に似合ぬ事をするので、両親は非常に心配し此の子供のために前後策を案じた事が度々であります、此のわんぱく子供は如何なる惡しき事をするかと申しますと、一は友達のをもぢや等を始めとして、他人の者をいきなり手をかけて、いやだ〜といふのもきかず、取りにかかるので、若し渡さない時は手當り次第着物の上でも、どこでもかまわず喰ひつきななかせ、其の暇に取りて逃げ歸りて座敷の隅に積み重ねて悦ぶ習慣があるのであります。今一つ

は火を持ち遊びあちらのいなぶら（藁を積みたる所）こちらのつくて（肥料を作るため藁草等つみたる所）に火をつけて「あーかじだ〜」と叫び土をつかみかけては此の上もない愉快としてるのであります、それ故両親もあちらからもこちらからも、ふしりを貰つていひ譯にこまるのであります、止むを得ず家中にしばりをして番人をつけた等もあり、又日に二三回位は一所につれ行けた等もあり、そこで遊はせ等して、色々手に手をつくせども中々此の子供はき、入れず、少しもよき方に向させん。そこで両親も、是非なく火吹竹又は火箸にて打ちなぐり、これからあーゆうことをすると打ち殺すぞと色々戒しめましたが子供は只黙して頭を下げる許で物をいひません。夫から又物言はずして座敷にすわつて、其のまゝねむつてしまひして

とも度々ださうです。

或日其の子のお父さんは私の許に來まして申しますにはどうしたらばあの子の性質がなるだらーと。私もあいさつにこまりて即答は出來ませんでしたが暫く立ちまして一計を案じました、私の思ひますにわ彼の子供は生れながらにして其の性質を持ちしに非ずと思ひます、必ず其の原因があるに相違ないから、その原因をしらべるのが必要でせうが、今私が極端な計を考へましたから其れをやつて見るがよからう。即彼の有するき物をもちや等一つ所へ積み重ねて、子供の居る所にて火をつけて一家内の者集りて「利三（小供の名）火事たゞ」と言つたらどうでしやうと申しました所がお父さんは直ちに家にかへり子供の居ない間に、子供の物残らず積み重ねて前に用意して彼

れのかへり来るや否や直ちに火をつけて「利三火事たゞ」と一家の者寄り集りて叫びました所が彼如何にかしけん。急に母の傍に座し手をつきて泣きながら「お母さんを父さんかにんく」とこゑをあげて改心したる風情ですから「それではをまへこれからお父さんやお母さんのいふことをきくことが出来るか」と問ひましたに彼は頭を地につけて返事しまして火に水をかけて消し止め、后父は静に利三に向ひ「火事は大變をもしろいものだろー」ととしに「をもしろくはない」とこたへました。父又「をまへは今までなぜほうぼうへ火をつけてをも白く遊んだのです」ととひしに「かにんく」といひて物をいひませなんだ尙父母は此の后如何にと心配してをりましたに、其の明る日より二三日は、誠にくをちつきたる

態度で、何か物を考へて、いるらしい様子でしたが、四日目になりて、母飯をかしがんとて火をたきつけたのを見て利三は急に口を開き「お母さん火はあぶないなあ」とひひましたそうであります。其の後日増にだんと性質はかはつてきて、火を大切に取り扱ふになりましたそふであります。それから十四五日たつてから「ぼーや汝はたいへんにをとなしくなつたから、をもちやを買つてあげや」と母がいひしに、彼れのいふには「ぼーはたく澤山あるからいらなく」といつて其の後、「ぼーは今日ははませんと、みよさんと勝三さんにもをもちやをかへしてくるよ」とひひて残らず返したそであります。をもちやの事は彼れ自ら其の非を知りて返すやふになつたのであります、こうゆうふうに少しの手段のためにかわつたので

あります、一体此の子供の性質は如何なる者でありますか、又如何して少の事に依りて是非善惡を省みるやうになつたのでありますか、御考へつきになりましたならば御示教を願ひ度のであります。

手毬歌（其一）

通信員 佐藤龜一

手毬と手毬と行逢て行逢て。一つの手毬がいふ事にやいふ事にや。こちらへどんせい奉公しよふ奉公しよふ。奉公口はどこかいなどこかいな。奥の奥の御番所じや御番所じや。御番所娘はよい娘よい娘。あしたの晩からよめりさしようよめりさしよう。よめり道具は何々じや何々じや。簞笥に兩掛はさみ箱はさみ箱。これだきしたて、やるから